

第1回勉強会における委員発言要旨

No.	発言要旨	発言者
1	ペットと違い、産業動物はやむなく安楽死させるケースがあるが、はっきり区別して議論してほしい。ヨーロッパでもできるだけストレスのない環境で大事に愛情を込めて飼いたいという気持ちに大きな差はない。グッドライフ、ジェントルデスである	竹延
2	EU型の考え方で日本の方向を規定していいのか疑問。日本の食文化では子豚や仔牛を殺すこと自体問題とする文化があり、EUの理念だけ持ち込んだら食料を生産する役割が機能しなくなる規制となる	竹延
3	国によって文化が違えば家畜の飼い方も違って来るし、愛護の価値基準も違って来るはず。必ずしわ寄せが生じる	竹延
4	本来の畜産は、「植物タンパクを動物タンパクに変換させる産業」、「おいしいお肉や畜産物を安定的かつ安価にいただける科学技術」であり、この基本的な重要ポイントは絶対忘れてはならない	萬家
5	日本に合ったアニマルウェルフェアを勉強会を通じて検討していけば良いと思う。ヨーロッパ等の真似はできず、日本でできる最大限のアニマルウェルフェアを実現させていくことが一番重要である	亀田
6	ヨーロッパの価値観、宗教に根ざしていることも考慮しなければいけない。反捕鯨運動がキリスト教をベースとしたものであるというようなことも留意すべきではないか	信国
7	アニマルウェルフェアと家畜衛生管理は矛盾しない。単に正常行動発現だけがアニマルウェルフェアではなく、5つの自由全てを合わせる必要。EUでも総合評価法という形で研究している	佐藤
8	アニマルウェルフェアと管理者の安全性・作業性との矛盾も無く、EUでは労働環境としてもいい状況を作ると考えられている	佐藤
9	改良されてきた家畜にも野生動物の時の行動発現が残っており、畜産という中でそれにもいかに対応していくかが基本スタンスである	佐藤
10	議論高めるには、一方向だけでなく、総合的に整理していくことが基本である	信国
11	国内自給率の問題等他の要因を考慮した日本型アニマルウェルフェアシステムを作っていくべきである	佐藤
12	企業戦略として広報活動にアニマルウェルフェアが組み込まれる心配もあり、企業のリードではなく、畜産の生産活動全体がアニマルウェルフェアに向くべきである	増田
13	・ 企業は、戦略の一つとして動物愛護を利用しており、畜産現場を十分踏まえた上で、基本方針や基準を決めているわけではない	萬家
14	・ 産業ということでは、最終的には市場の判断となり、差別化ということが戦略の根っこにあるとき全体を1つのものにすると、差別も消えてしまうわけで差別化が成立している部分も考慮する必要がある	信国
15	・ 食品としての面では、同じ食品内の競争だけでなく食品間の競争もあることを留意しなければならず、事例を集めてもどこまで一般化できるかを考えておく必要がある。また、市場を1つと見なさず、日本の特定JASは、EU基準を満たしていると思うので他の市場でどう評価されるかということも大事である	信国
16	2010年にヨーロッパからウェルフェア産物が輸入される時、日本の畜産が大丈夫なのか、そっぽを向かれるのではないかとことをすごく心配している。それまで、日本型のアニマルウェルフェアを確立して行かなくてはならない	佐藤

第1回勉強会における委員発言要旨

No.	発言要旨	発言者
17	EUの基準が科学的にすべて正しいか疑問であり、基準作っても他地域で生産したものが入ってくる等多様なニーズがある中で生産者を抜きでは、結果として国民が不幸になるのではないか	都丸
18	アメリカでは、生産者団体が科学的な根拠に基づいてEUとは違った両者の歩み寄る地点を現実的な形で探し当て、実施されている	都丸
19	OIEのガイドラインは、内容は同意できるものであり、国内と大きな違いはない。アメリカでは、企業と生産者が一定の合意を見いだせたが、日本の豚肉の場合、50%輸入依存している状況でEU並みにアニマルウェルフェアを導入して生産性下げたら国内で生産する必要ないと言われていたようなものであり、愛護という美しい言葉だけが先行することのないよう慎重な議論をお願いしたい	竹延
20	アニマルウェルフェアによって生産費高くなる分をどう負担するか。EUでは、補助金やニッチ産業として対応しようとしている。アメリカでも全体としては、ニッチ産業として対応している	佐藤
21	日本にも生産者や消費者の中にいろいろな意見があり、EUの人が割高でも良いと了解しているかどうかきちんと考えていかなければならない。日本で生産したら1~3割でなく、何倍かになると思うが、日本の消費者が受け入れてくれるかどうか資料として作っていただきたい	都丸
22	EUで直接支払いを行うとすると、そういう措置があつてアニマルウェルフェアが成立するものであるということの認識が必要である	信国
23	アニマルウェルフェアを現場におろす場合は、市場経済の中でどのようにおこなうか、体制をどう作るかが一番の課題であり、どういうふうに消費者が支えてくれる生産体制を作るのか、方向性も含めて議論すべきである	高橋
24	EUでもアニマルウェルフェアを議論する場合、消費者や生産者等全部のステークホルダーを集めている	佐藤
25	休耕田における放牧可能性についての実現性、費用や効果などモデルケースを調べるのもよい	森
26	全体としては、アニマルウェルフェアと、産業としての生産性を上げるということが基本的には同じ方向に向いており、その中でこの部分は行き過ぎだということを少しずつ是正していくというのを生産者から消費者に行っていた方が理解を得やすいのではないかと	信国
27	消費者に畜産の姿を知らせてアニマルウェルフェアをみんなのテーマとして共有することに力を注ぐ必要がある	増田
28	生命倫理みたいなものをアニマルウェルフェアと関連して教育現場とか消費者への情報提供の中にきちんと入れていきたい	増田
29	「食の安全」では、5年前のBSE以降、大きな関心事となったが、感じたことはあまりにも情報が不足していること、限られた情報で誤解されているケースが多いことに遭遇した	萬家
30	食育等を進める中で、植物や動物の命をいただいているという意識をあまりにも日本の子供たちや消費者は持っていないので知らせるべきである。また、アイガモ農法のアイガモを殺して食べるころまでは必要ないのではないかと。誤った概念を持った方がおり心配である	亀田
31	学問としてのアニマルウェルフェアをどう作っていくか、研究体制の充実も議論できればよい	高橋
32	EUの5カ年行動計画のように農業政策的な発想で検討することが重要である	佐藤
33	アニマルウェルフェアを重視した生産から消費までのチェーン開発を日本でどのように行うか検討した方がよい	松木
34	人作り、生産者から消費者までいかに意識をもってもらうかの教育、専門家の教育、研修プログラムの検討を行ってはどうか	松木